

月例会ダイジェスト【114】

11月の月例会は「JAPANで働く外国人の安全安心を支えるプロに聞く！外国人ニーズや課題」と題し、ハイブリッドで開催。コーディネーターは岩永桃佳氏（東邦大学大学院）、海野賀央氏（株JERA）、帰山晶子氏（日野自動車株）、駒井若奈氏（三菱ふそうトラック・バス株）、原田若奈氏（川崎市立看護大学）、武藤剛氏（北里大学医学部）の6名が担当した。

最初に登壇した行政書士事務所TAKO・GIVERの大北晋也氏は、「日本人ファーストを整理する」というテーマで登壇し、外国人の在留・就労支援に携わる中で見えてきた課題を提起した。大北氏は、「日本人ファースト」の最大の問題点として、「良い外国人もいれば悪い外国人もいる」という当然の前提が失われた「排外主義」が広がっている現状を指摘するとともに、「外国人問題」という広範なテーマが曖昧のまま議論されていることに警鐘を鳴らした。こうした議論のすれ違いが生じる背景として次の6点を挙げた。

- ①外国人に対するイメージの多様性（技能実習生から有名アスリートに至るまで）
- ②立場・視点の違い（外国人の知人の有無、企業では労働者、地域では生活者など）
- ③関心事の違い（不動産取得、治安悪化、社会保障制度のタダ乗りなど）
- ④統計データの取り方（暗数の解釈）、体感治安の相違
- ⑤知識不足（移民の定義、労働力不足、人口減少、特定技能実習生などの在留資格に関してなど）
- ⑥日本の経済力低下による日本人の相対的地位低下

これらの点について「誤情報に惑わされず、専門家が発信する正確な知識を学び、自分の五感を信じ、同じ人間として接することが重要と述べた。

次に登壇しためぐみ国際行政書士事務所の鈴木恵氏は、行政書士として外国人の在留手続きサポートを行う傍ら、国際線客室乗務員として勤務している。業務で外国人と関わる中で気づきとして、彼らの来日目的が母国への仕送りからキャリア形成まで多様であること、言葉の壁でトラブルに陥ることが多いこと、職場での助け合いについても文化の違いを意識すること、挨拶に気づかいの一言を添える、日常で声をかけるなど小さな配慮を積み重ねることの大切さなどを語った。また外国人の中にも自分と合う人・合わない人がいることは至極当然であり、同じ人として一歩踏み込んで向き合ってほしいと強調した。

最後に登壇したJHesperus Japan株式会社の加藤裕貴氏は、冒頭、あえて英語で話し始める“ドッキリ”を仕掛けた。会場には一瞬、戸惑いの空気が漂ったが、それは「日本人だから日本語で話す

はず」という思い込みに一石を投じる試みであった。加藤氏はこの演出を通じて、私たちが外国人に対して無意識のうちに自分自身の思いや考えの基準となる先入観を持っていたり、固定観念に縛られていたりする傾向が非常に高い点を指摘した。さらに現在、日本に住む外国人の61.1%が企業で働いているというデータを示し、職場での異文化理解や多文化共生の必要性を強調した。具体例として、外国人社員が懇親会で自身のスプーンやフォークを使って料理を取り分けたことに対し注意を受けた場面を挙げ、文化や慣習の違いに対する相互理解があれば避けられた出来事であったと語った。同時に「なぜ彼・彼女がその行動や考え、発言に至ったのだろうか」という考え方が重要と指摘した。加えて、異文化適応のプロセスとして、大きな期待を持つ「ハネムーン期」に始まり「抵抗→受容→適応」という段階を経る「Uカーブモデル（S.リスガード提唱）」を提示し、異文化理解において最も重要だが心身のエネルギーを要する「抵抗期」に周りから適切なサポートを受けることで、異文化を拒否せず受容し、そして適応の段階へと進んでいけるとした。その際、G.ホフステッドが提唱した「文化の玉ねぎモデル」に示される、核となる価値観に至るまでの外見から心の中へ距離を縮めていくための段階的理解の必要性を説明した。無意識に自分の文化を中心に考えてしまう「自文化中心主義」から異なる文化を認め合う「文化相対主義」への転換が多文化共生の鍵であり、そのためには他者との対話や交流が不可欠であると語った。

ディスカッションでは、外国人労働者の職場定着やメンタルヘルス向上において、先輩外国人がトレーナーやメンターとして存在することの意義が強調された。実際の事例を通じて、こうした支援体制が安心感を生み、職場への適応を後押ししていることが紹介された。また、「暗黙の了解」を明文化する工夫や、日本の健康診断・受診基準といった医療制度への理解を促進する必要性についても意見が交わされた。外国人にとって職場は生活の中心であり、メンタルヘルス支援には「小さな変化に気づける存在」の重要性が示唆された。

一方、コロナ禍以降、SNSでの母国コミュニティとのつながりが強まる中で、日本語習得の遅れや職場でのコミュニケーションの希薄化といった悪循環も指摘された。これに対し、翻訳アプリの活用など積極的なコミュニケーションの重要性が訴えられた。また武藤氏は、「外国人労働者は元気だから問題は起きない」とする“マイグランドワーカーズバイアス”に触れ、実際はメンタルヘルスや制度理解に課題を抱えるケースが少なくないと指摘した。

最後に、さんぽ会の福田洋会長は、国籍を超えて「日本で働く仲間として大切に」視点を持つことの重要性を強調し、会を締めくくった。

さんぽ会の詳細は下記サイトをご覧ください。

- ホームページ <https://sanpokai.net>
- FB ページ <http://www.facebook.com/sanpokai>